新著紹介

よくわかる輸血学
必ず知っておきたい輸血の基礎知識と検査・治療のポイント

大久保光夫，前田　平生，著
㈱羊土社，東京，2005，定価3,990円

術中，術後の循環を制御する時最も簡単な目安となるのは血圧である．そのためにこそ麻酔科医は麻酔チャートの血圧変動を少なくするように腐心するのである．血圧を制御するには心拍出量，末梢血管抵抗が関与しており，前者は心収縮力と循環血液量が重要である．通常の麻酔管理で血圧上昇に対しては，早急な対処として血管拡張薬や深麻酔が中心となるがいずれにしても血圧低下よりは深刻さがない．

一方，血圧低下の場合直ちに対処しなければならないことは言うまでもないが，この原因の多くはあらかじめ心予備力低下症例や心臓手術でもなければ出血による循環血液量減少が大きな原因となる．これは血管収縮薬や浅麻酔では対処できないのである．この原因による血圧低下が更なる心機能の悪化，不整脈の原因にもなり得る．血圧変動がなければ心機能が突然悪化することは少ないと思われる．術中ショックの原因の最多は大量出血であることからも循環血液量を維持することの重要性がわかる．術中にこれを維持するには輸液が最初に行われるが最終的には輸血が避けられず，この内容の理解が循環制御の重要なポイントとなる．

今回紹介するのは「よくわかる輸血学」というわずか150頁であるが，日常輸血を行っている麻酔科医の多くはこの内容は知っておきたい．対象は研修医から輸血認定医を目指す人までと広範囲である．従来までのいわゆる輸血本はいわば臨床家無視，検査部門重視の立場から書かれており多くの現場の医師の興味を引き付けることが出来ず，結局輸血は出血の単なる補充療法との認識を出る機会を失わせるものであった．この本は分からないところを調べるというより全てを覚えておき臨床に向かうといった趣のある本である．このため普段の知識の再確認のための本である．著者たちは日本自己血輸血学会でも活躍され輸血と臨床の接点に立っておられ，この本でもその精神が遺憾なく発揮されている．主に必要最小限の内容が左頁にありチャートとして85項目に分けられ，右頁にその解説があるというスタイルでわかりやすい．各科についての輸血もあり実際的であった．

序章の輸血の実際では採血方法がイラストで紹

Presented by Medical*Online

介され面白い．小生は血管確保の際，叩いて血管を出すがこれは失礼な行為と紹介されている(？)．第1章ではABO不適合の最大の原因は血液バックの取り違えで判定ミスは14%に過ぎないことが分かる．それ以外の副作用で感染症が実際はほとんどないことから同種血輸血がいかに安全な医療行為であるか改めて実感できる．未知のウイルスによる可能性を力説されても実感がわかない．

第3章では血液製剤の需給率が紹介されており安易にアルブミンの使用は戒められるべきものであろう．HIV感染の報告はNAT検査導入後も1例あったがこの数が多いと見るか，僅かと見るかで輸血の安全性の評価に繋がると思う．臨床家でも輸血に興味があればこの内容では少々不満足であるかもしれないが，圧倒的多数の臨床家はこの内容なら我慢して通読できると思われる．日常に輸血をしている時，ただの補充療法と考えずに知識を持って行った方が有意義な臨床が行えると信じている．

第5章の輸血療法の実際では輸血適応の点での記載が紋切り型になっている点は惜しい気がするが，症例毎に正しいと思われる輸血方法が書かれ，実際の臨床現場からは少し違和感があるが，そこは輸血医学という点ではこのような解釈になっていることを知りながらこれを少しでも臨床に反映できればよい．この本を通読すれば輸血の危険性は冷静に考えればほとんどないため過度に無輸血手術に固執する事はないと考えられる．また，第6章の移植医療，細胞療法もわかりやすいイラストで書かれており知識を整理するにはいいと思う．

本学会員でも循環を構成している循環血液量，特に輸血に興味を抱いている方は少数と思われるが，忙しい臨床の合間を見て一冊でも輸血の本を読もうと思った場合，この「よくわかる輸血学」は表題どおり簡単であり，この内容を踏まえれば実際の臨床では十分であり，曖昧であった知識の整理には最適であると思われる．

(菊名記念病院麻酔科　小堀　正雄)

Presented by Medical*Online